

## 医心 伝心

# 日本人における脳卒中の 現状と予防

県医師会理事 平野八州男

脳卒中は世界では2秒に1人が発症し6秒に1人が死亡する重度の疾患です。わが国では2050年には超高齢社会を迎えるとされており心筋梗塞や脳梗塞などのアテローム性疾患が急増すると予測されています。

脳血管疾患における死亡率は近年の高血圧治療や急性期治療の進歩により減少傾向になってはいますが、それでも死因別死亡率では年間13万人と第4位であり、寝たきりあるいは介護を必要とする患者のうち脳卒中が原因である割合は第1位です。人口動態の高齢化や食生活の欧米化による肥満や脂質異常、糖尿病などの代謝疾患の増加により更に増加してきます。

2020年には脳卒中患者は287万人以上に達すると予測され、今後の人口構造の更なる高齢化の進行に伴い増加していくものと考えられています。

脳卒中に関する医学はこの数十年で著しく進歩しています。以前は脳卒中発症後、昏睡状態になると自宅で寝たきりとなり食事摂取不能となって数週で亡くなれるという医療として何もできない状態でした。逆に考えると寝たきり看護や身体障害者が少なかったといえます。しかし、今は脳卒中発症後は急性期医療の進歩や障害が残っても高度なりハビリテーションを受けることができます。発症前と同程度の生活ができる可能性は低いものの、社会復帰ができるまでに回復することが少なくありません。

OECD（経済協力開発機構）ヘルスデーターによれば、コンピューター断層撮影装置（CT）は人口100万あたりの設置台数はOECD平均が23.8に対し、日本は97.3で4倍多く、磁気共鳴画像診断装置（MRI）は、OECD平均が12.6に対し43.1、PETに関しても100万人あたり4台近く設置されています。急性期治療病床数は人口1000人あたり8.1床でありOECD加盟国の中で第1位です。その結果、日本の平均寿命も世界で最も高く健康寿命も世界第1位となっています。しかもその高度な医療は比較的予算をかけずに提供でき、必要な時に医療を受けられる世界有数の国と思われれます。

脳卒中を制するためにはまず、未病に対する予防医学を徹底すること、万が一発病した場合には早期来院精査、早期治療することが大事です。

Brain attack 時代になった現在t-PA療法をいかに早く開始するかが脳梗塞の予防を左右します。そのためにも、脳卒中情報システム事業にて患者の発症を診療状態に関する情報を継続的に集積し会員の皆様に活用して頂ける様努力していく次第です。

今後ともご協力の程、宜しくお願い致します。